

九州の演奏会から

檜垣智也

音楽の友（2011年12月号）

アクースモークは電子音響音楽のためのシステムであり、ライブでミキサーを操作し、多数のスピーカーをコントロールする。今回のプログラムの中で注目されたのは、福岡市で電子音楽をも手がけた先駆者今史朗（1904～1977）の作品が復活演奏されたことである。大阪万博70のために作曲された『生命的水』で、音の素材として電子音のほかに水滴、水泡音が組み合わされ、今尚新鮮な音響をかもし出した。この企画構成をしたのは、作曲家中村滋延（九州大学教授）で、彼の作品では『パッション』が演奏された。原田大志の独奏ヴァイオリンが「シンピューター音響とともに生演奏し、同時にビデオ上演も加えた。五感全体で訴える。中村はインド起源の叙事詩『ラーマヤナ』をモティーフにした作品を連作しており、これも悔恨や悲しみが表現された作品だが、映像は物語をえて反映しない抽象的図形。檜垣『インコープアレル』は3・11を意識した作品で、完全暗転の中で演奏されて集中力を高めた。（9月27日・アクロス福岡円形ホール）

（野中園亭）